

A.C.ドリーニン 『ドストエフスキイとストラホフ』

松 本 賢 一

解説

本稿はソヴェート期ロシアの研究者A.C.ドリーニン（Аркадий Семенович Долинин）*（1880-1968）の論考「ドストエフスキイとストラホフ」（Достоевский и Страхов）の全訳である。この論考が最初に公にされたのは、1940年発行の«Шестидесятые годы»（60年代）においてであったが、その後更に完全なものとして1963年の«Последние романы Достоевского»（ドストエフスキイ最後の長篇群）に収録された。本訳稿は1989年の«Достоевский и другие»*（ドストエフスキイとその他の人々）にあるテキストを底本とした。

著者ドリーニンについては、ロシア・ソヴェート文学、特にドストエフスキイに興味のある方には改めて紹介するまでもない、ソヴェート時代の代表的な文学研究者であり、日本では専らドストエフスキイ研究者として知られているが、実際には象徴派、プーシキン、ゲルツェンなどその研究の射程は広い。上記«Достоевский и другие»の巻頭に置かれたB.トゥニマノフ（В.Туниманов）の解説を見ても、ドリーニンの辿った研究者としての道が決して平坦なものではなかったということは良く分るが、これを詳述することは本稿の目的とする所ではない。ただ、次のことだけには触れておきたい。

大祖国戦争を含む1940年代は、ドリーニンにとってとりわけ厳しい不遇の時期であったといえる。それは、国を挙げての戦争、レニングラード封鎖と

いう当時のロシア人たちが一様に嘗めざるを得なかった困難とは別に、文学研究家としての苦難にドリニンが襲われていたからである。本来自由であるべき文学や文学研究に携わる人々の口にも、国家による官製イデオロギーが避け難い羈絆としてかまされようとしていた。ソヴェートの拠って立つ社会主義、共産主義、マルクス・レーニン主義に適應させ辛いどころか、これらのイデオロギーに対する根源的な批判を含むドストエフスキイの文学そのものが表向きは白眼視され、紹介されるにしても、それは歪曲と一定の留保を伴うことが多かった。ドストエフスキイ研究に没頭するドリニンのような研究者は、その優秀さゆえに一層「お上」による批判を向けられた。今ではむしろ悪名のみを残すことになったエルミーロフ（В.Ермилов）によってドリニンは、これもまた優れたドストエフスキイ研究者キルポーチン（В.Кирпотин）と共に激しく批判されたのである。ドストエフスキイを社会主義思想の先駆者ゲルツェン（「科学的」社会主義ではなく空想的社会主義ではあったが）と並べたり、19世紀保守反動、スラヴ派を自任するストラホフのドストエフスキイへの影響に光を当てたり、という仕事は御用学者からすれば許し難いものであった。

とはいえドリニンは節を曲げることがなかった。彼の仕事は文学作品の解説、解釈だけに留まらない。全4巻に及ぶドストエフスキイの書簡集の監修、国家的事業ともいえる「文学遺産」シリーズにおける綿密な仕事——このような手堅い功績は安易な党派的批判を受け付けるものではない。日本では<スースロヴァの回想><同時代人の回想>などが知られている。*

長々とソヴェート時代の文学研究のことについて述べたのは、我が国においてもドストエフスキイの創作活動に及ぼしたストラホフ（Николай Николаевич Страхов）の影響が余り顧みられておらず、ソヴェート連邦崩壊後およそ30年が経とうとしている現在でも、一部の専門家はともかく一般にはこの問題が等閑視される嫌いがあるということ、そしてそれは、緻密であることこの上ないが、イデオロギー上の偏頗さを免れ得なかったソヴェート時代の文学研究の桎梏がまだ完全には消え去っていないのではないか、ということを書いたからである。幸いに、以前は古書やマイクロフィッシュなどで読むしかなかったストラホフの著作が、今は部

分的にとはいえ出版されている。本来ならば、それらを翻訳紹介するのが至当であるが、まずはドストエフスキイ文学におけるストラーホフの影響役割を主張するドリーニンの論考を描いながらも翻訳発表しようと決めた次第である。

本文には多くの原註が付けられているが、その大部分は引用元を示すだけのものであり、仮にそれを和訳しても、それらの引用元が古いことやロシア語の文献であることを勘案して、そのまま示した。引用元を示す以外の目的で付せられた原註については、日本語に直した。なお、原註に出て来る〈Там же〉は「同上」の意味である。原著は脚注を用いているので、この〈Там же〉が多いが、本稿は脚注ではなく後注によって注釈（1、2、3～）を示しているので、「同上」の使用は訳者の判断によって異なるものとなっている。また、必要と思われる箇所には「訳注」（i、ii、iii～）を付し、原註の後に置いた。

原著で強調されている語は、本訳稿ではイタリックで表記した。

*以下、ロシア人の名と父称を示すイニシアルは、ラテン文字ではなく、キリル文字によった。

**Долинин А. С. Достоевский и другие: Статьи и исследования о русской классической литературе. Л., «Художественная литература», 1989.*

*『スースロワの日記——ドストエフスキイの恋人』（ドリーニン編集、中村健之介訳）みすず書房、1984年。

『ドストエフスキイ 同時代人の回想』（ドリーニン編集、水野忠夫訳）河出書房新社、1966年。

ドストエフスキイとストラーフ

A.C.ドリーニン

1

1894年、当時人気のあったモスクワ心理学協会に、同じ歳のレフ・トルストイと並んで名誉会員に選ばれた際、ストラーフに捧げられた人物評は次のようなものであった。

「広く多方面に亘る教養を有し、また繊細にして深遠なる思想家、傑出した心理家であり美学者であるH.H.ストラーフ氏は、一個人としても秀でた特徴を持っている。すなわちその信念の不拔なること、学術や文学において支配的となっている潮流に抗して進むことを決して恐れず、時流に抗い、その時その時に迫害を被っている偉大な哲学や文学の擁護には怯むことがないという点である。」¹

当時モスクワ心理学協会を牛耳っていたのはH.グロートである。彼は多くの点でストラーフと見解を同じくする観念論者にして、ショーペンハウエルの支持者であり、その形而上学を、古めかしく、キリスト教的なスラヴ派の「否認の倫理学」を一新するために利用しようとしていた。ストラーフが「支配的となっている潮流」に（もちろん唯物主義と実証主義に）抗い、チェルヌイシェフスキイ、ドブロリユーボフ、ピーサレフ、ネクラーフ、サルティコフなどの19世紀後半の民主主義陣営と戦ったということが、ストラーフを選ぶに際しての特別の功績として認められたのである。ストラーフの人物評は更にこう続いている。「政治思想家としてのH.H.ストラーフ氏は、常にスラヴ派として、スラヴ派擁護の筆を振ってきた。」

実際にストラーフは広く多方面に亘る教養の持ち主であった。彼は哲学者であり、歴史家であり、文学研究者であり、また生理学者で心理学者であった。受けた教育からすれば、彼は自然科学者である。理学部を卒業し、

動物学の学位論文（「哺乳類の手根骨について」1857）を提出している。彼の哲学的著作：「自然科学の方法と一般教育におけるその意義について」（1865）、「全体としての世界」（1872）、「哲学論集」（1895）、心理学の夥しい論文、わけでも「心理学と生理学の基本的諸概念」（1886）、文化論の三つの著作（「わが国の文学における西欧との闘い」1882－1887年、最初は1870年の「黎明（Заря）」誌¹）——これらの著作においては、ゲルツェン、ルナン、テーヌといった、「右派」の観点からすれば憎むべき思想家たちに対して、当時（1870年代）としては態^{わざ}とのように「穏やかな」調子の評価が下されている。これらの著作において常に顕著なのは、書き手の該博な知識である。

ストラホフが博学であるのは、透徹した言葉遣いや叙述の明晰さで群を抜く、その文学論文においても同じである。細心な研究者としての調子と科学的な説得力のある調子を、彼は自らの下す評価や批評の中で守ろうとして来た。このことが彼にとって一層容易であったのは、自然科学に従事する中で得られた素養のゆえである。これは彼の優れてバランスの取れた性格にぴったりと合致していたのであり、おかげで彼が何かで音頭取りの役割を果たすことは一度としてなかった。

「炭素^{あた}中りの中であって正気である者の一人」——その墓碑の上にはこう書いて良からうと、ストラホフは言っている。彼にとって、「炭素中り」なのはひとり「ニヒリスト」、「同時代人（Современник）」や「祖国雑記（Отечественные записки）」の追隨者のみではなかった。

トルストイに乱暴に反旗を翻した、「正教の擁護者たち」をもストラホフは同じように呼ぶことが出来たであろう。「彼らが信仰の側に立つのは」と彼は皮肉っている。「彼らが他者の見解をあらゆる仕方で歪曲し、敬意を払おうとしないことを自らに許しているからだ。彼らが道徳の側に立つのは、がさつで乱暴であることを義務と見なしているからだ。」²

モラルに関する諸問題についての「自由主義」（リベラリズム）ⁱⁱ ぶり、「身内」に対しても、或る程度まで自由に接し、時折にはあれ彼らを批判したり非難したりすることが許されるようなポジション、—— こういったことのお蔭で、ストラホフはトルストイやドストエフスキイのような人たちの厚意を得る権利を得たのである。

2

厚意とは言うものの、それは心の底からの、精神的な親密さを言うのではない。極めて親しい関係はあった。ストラーホフは時にそれを「必要」であるとさえ感じた。ストラーホフは、ドストエフスキイの二つの雑誌、『時代(Время)』と『世紀(Эпоха)』に積極的に関わり、編集会議でドストエフスキイとしばしば顔を合わせ、ドストエフスキイの自宅にも赴くことがあった。ドストエフスキイが国外にある時には、その金銭問題を捌く為に奔走もした。

思想という点で言えば、二人の間には文句なく幾つかの共通点があった。それは何よりもまず哲学的な諸問題においてであり、そして一時的なものではあるが、社会的政治的な問題、文学的な問題においてである。ドストエフスキイの影響力や権威を利用しようというストラーホフの傾向は実に当然のことと思われた。実際のところは、この二人は、『悪霊』が執筆された時期を例外として、当時の最も眉焦りの問題、安閑とはしてられない問題において、本質的なところでは意見を異にしていたのである。それは青年層の間に見られる動きについて、チェルヌイシェフスキイやドブロリユーボフの一派について、文学と批評の課題をどう理解するかについて、といった問題である。ストラーホフは自ら記す回想においては、自分の図式に当て嵌まらない時には、出来る限りの方策を用いて一連の事実の与える印象を弱めようと努めている。そのような事実についてストラーホフは、ほんやりと仄めかしたり、それらの事実が持っている本当の意味が消えてしまうような文脈で語ったりするのである。後にストラーホフが、自分の論文にドストエフスキイが調子や性格を極端に変えて施した修正——特にドブロリユーボフの『呼子(Свисток)』誌に関する論文に施した修正について、あまりものを言わなかったのはそういうことである³。

「学生の事件」についての、ドストエフスキイの雑誌『時代』編集部も含む、ペテルブルク社会の先進的な人々の、逮捕された者たちへの同情につい

てストラーフが語る時、それは嘲笑の響きさえ聞き取れるような、明らかな皮肉を含んでいる⁴。

ストラーフは僅かに触れているだけだが、彼とドストエフスキイの間には1865年にちょっとした諍いがあった。そしてドストエフスキイの結婚（1867年のことである）まで彼らは顔を合わせていない。この諍いの原因が何で、なぜ二人が袂を分ったのかについて、ストラーフは口を噤んでいるが、世俗的な問題のせいではないと考えるべきだろう。トルストイに宛てた書簡の中で、ドストエフスキイとの関係についてはこのような言葉がある。「私はドストエフスキイのことを実に不満に思っています。彼は日毎に見るからに旧弊になって行きます。」⁵「私は<…>ドストエフスキイがするようには自分自身を愛することは出来ません…」⁶「こんなことを書いて許して頂きたいのですが、私はツルゲーネフとドストエフスキイを人間だと思えないのです。ですがあなたは人間です。」⁷と、トルストイに向けて続く言葉には、やや諂いの響きがある。アンナ・グリゴリエヴナⁱⁱⁱ宛の手紙で、ドストエフスキイはストラーフが自分に対して好ましくない態度を取っていることに触れている。その直近のケースでは、その手の問題になったのは長篇小説『未成年』であった⁸。

ネクラーフとサルティコフ＝シチュエドリンの雑誌に長篇を載せたということ自体が、ストラーフばかりかマイコフにもはっきりと悪意を持って受け取られた。「この二人、私は嫌いです、が、余計に気に入らないのはストラーフです。二人とも癖があります。」⁹と、1875年2月11日にドストエフスキイはアンナ・グリゴリエヴナに書き送っている。『未成年』以降、ドストエフスキイ晩年の最後の5年間（もちろん、偶然の、また公的な場での顔合わせは別だが）、二人は会っていない。

既にドストエフスキイ没後、自らこの作家との関りを整理する中で、ある私的な出来事について、ストラーフは持ち前のやり方で次のように総括している。「人と人との近しさというものは、総じてその人らの本性に拠るものであり、極めて望ましい条件の下では、或る節度を越えぬものである。我々は、誰しも自分の周囲に、誰も入れない一線を引くもの、いや、誰も入れることの出来ない一線を引くものである。かくて私たちの親密さも自分た

ちの有っている特性の内に障害を見出したのである。」¹⁰

ドストエフスキイの死の直後に、ストラホフは矢庭に興奮悲嘆して、その「恐るべき空虚感」についてトルストイに書き送っている。だが、ここでも彼はこう付け加えない訳には行かなかった。「ここ暫く私たちは上手く行っていませんでした」¹¹と。お互いの疎遠さだけではなく、ドストエフスキイに対する否定的な態度、ほとんど憎悪を示している。ドストエフスキイへの態度を彼がこのように開けっ広げに認めているということは特に意味深長である。しかもこれは短い遣り取りや侮辱をこととする時のものではなく、彼の人生の結論なのである。まさに彼は「真理の保持者」トルストイの前で告白しようとしている。ドストエフスキイを礼讃することが目的の筈の回想の中だけでなく、自分は本当は一生ドストエフスキイについて嘘を吐いてきたのだ、と。彼はドストエフスキイの相貌を、自分の道徳的観念や確信に照らして理想的に描き出して来た。しかも自分でそう認めているのだ。態と嘘を吐きました、全部絵空事です、と。書き終えたばかりのドストエフスキイの伝記をレフ・トルストイに送るにあたり、彼は自らの「懺悔」を書いている。「これを書いている私は常に闘いの中にありました。私は自分の中に高まってくる嫌悪感と闘っていたのです。〈…〉私はドストエフスキイのことを善き人とも幸福な人とも考えることが出来ません（この二者は実は一致するものです）。彼は邪悪で、妬心が強く、淫蕩でした〈…〉彼に最も似ている人物は、『地下室の手記』の主人公、『罪と罰』のスヴィドリガイロフ、そして『悪霊』のスタヴローギンです。〈…〉あれは自分で自分を幸福者で英雄であると想像して、そしてただ自分だけを愛していた、まことに不幸で不快な人物でした。私はドストエフスキイのそういう側面を書き留め、語ることが出来るでしょう。ここに誌したものよりも多くの出来事を、私は遙かに精彩豊かに書くことが出来ます。ずっと真実に近い短篇ができるでしょう。しかしその真実には死んで貰うことにしましょう。至る所で、あらゆることで私たちがしている如く、人生の表面だけを見せびらかせておくことにしましょう。」¹²

A.F.ドストエフスカヤはその『回想』の最後で、ストラホフの人物を然るべく評価している。ドストエフスキイの道徳的風貌に関するストラホフ

の嘘を暴くに十分な事実^{iv}を彼女は引証している¹³。

ならば、真実をはっきりさせようという意図をもって、ストラーフが注意に注意を重ねて伝えている事実は、それらが真理かどうかを探るためにも組上に上す必要があろう。何よりも、ストラーフの先鋭な論理の誘惑に屈しないこと、信憑性を図って、境界を明確にすることである。いや、問題は事実そのものだけにあるのではない。むしろ特定の目的に合わせたそれらの事実の説明にある。このことは、60年代前半のドストエフスキイの二つの雑誌の変転に関する際には特に意に介しておかねばならないことである。この場合ストラーフが、その時期の社会生活において何が起こり、作家の編集活動にそれがどのように反映したかを私的に知っているほとんど唯一の同僚であったことを考えれば尚更である。当時の文学潮流における闘いに、この上ない形で参加した最も身近な同僚として、ストラーフは知っているのである。ドストエフスキイを、あらゆる点での自らの同志として、スラヴ派として、それも熱心なスラヴ派として、ニヒリズム、物質主義に対する闘士として彼を見せようとしないう限りで、ストラーフの証言は極めて価値あるものである。

ドストエフスキイの様々な時期の経済状況や二度に亘る外国旅行（1862年、1863年）、着想したばかりの長篇や中篇の出版社への売り込み等々についてストラーフが書いていることに関しては、それなりの扱い様もあるだろう。ドストエフスキイの殊に個人生活に関ってくると、ストラーフは一層正確になり、それに応じてその情報の意義は高まっていく。

しかしながら、繰り返しにはなるものの、ストラーフのもとに私たちが見ることの出来る、ドストエフスキイの創作活動を解明する数々の資料の根本的な重要性は、実のところその様な点にあるのではない。ストラーフの与える情報が特に価値を明らかにするのは、彼が私たちにとって回想記者であることを止める時である。どれ程偉大な人間であろうとも、個々の人間の創作活動が個別のものでしかあり得ないような課題に原則的かつ広い視野で取り組む思想家－哲学者に彼がなるその時（モメント）からなのである。

ストラーフがドストエフスキイと知り合うのは1860年代初頭、ドストエフスキイがシベリアから帰還して間も無い頃である。彼らは二人とも、当時

相当に名の知られた教育家にして「ベリンスキイ風に文学を教えていた」A.П.ミリュコフ宅を時々訪ねていた。ミリュコフとドストエフスキイ兄弟とは既に40年代から親しかった。彼はペトラシェフスキイ・サークルの一員であり、ドゥーロフのサークルのメンバーであった。創刊されたばかり(1860年1月)の雑誌『松明(Светоч)』の事実上の編集者であったミリュコフの家には、毎週火曜日に詩人のアポロン・マイコフ、ドストエフスキイ兄弟、フェリエトン作者で詩人のД.ミナーエフ、若き日のВс.クレストフスキイなど、色々な文学者たちが集まっていた。ストラーホフもここに招かれたのである。彼は『松明』の第1号に自らの論文「現代におけるヘーゲル哲学の意義」を發表し¹⁴、それを以ってペテルブルクのメジャー出版物の世界に登場したのである。

3

二人は当初、著しく関心と方向性を逆にする者たちとして、そして世代と文化の異なる者たちとして出会った。哲学と動物学の学徒であるストラーホフは、本人の言によれば「ドイツ人の著作研究に勤しみ、彼らに啓蒙の指導者を見ていた。」¹⁵ゲーテ理解を自分にとって教養以上のものとするストラーホフは「科学、詩、音楽、プーシキン、グリンカ」を崇敬していた。——つまりは30年代の理想主義者そのものであり、これもまた程なくドストエフスキイの傍に現れることになるアポロン・グリゴリエフと似ていた。

この時期ミリュコフのサークルに出ていた文学者たちは、とりわけ、名の売れていることのみならず、思想の豊かさと、それを表明するときの熱の高さでも余人に傑出していたドストエフスキイその人は、ストラーホフとは逆にまるでドイツ人を尊敬していなかった。彼らは「フランス人の著作を熱心に読み、政治と社会の問題こそが彼らの目前の問題であって、それは純粹に芸術的な関心を凌駕していた。」ストラーホフの言うところによれば、当時ドストエフスキイは「そのような社会評論的な方向性にどっぷりと浸っていた。」彼は「環境理論」を堅持し「人間の様々なタイプ、主として低い身

分の憐れな人々の諸タイプを観察し描くこと、そしてそのようなタイプが周囲の状況の影響下にどのようにして出来てきたのかを示すことを」自身の課題としていた。人間の性質や行動についての自らの見解を、「道徳的要求という高处からではなく、理性、高潔さ、美という尺度によってではなく、あれこれの影響や、人間の本性が持っているどうしようもない柔軟性の避け難い力という観点から」ドストエフスキイは述べていたのである。

ドイツの主観観念論的美学は、今日の様々な理想や心配を外にして芸術家を人生よりも高处に据えており、それはストラーホフという人物の中で「フランス流理論」と、唯物論的で啓蒙主義的な理論とぶつかっていたのである。それは、ストラーホフの規定するところによれば、「現代の瞬間への奉仕」と「社会生活における直近最新の特性」を様々な形象として捉え、反映することを求める理論であった¹⁶。それゆえ、かくも権威ある証人ストラーホフによって実にはっきりと証言されているのは、ドストエフスキイの「信念の甦生」が、彼の流刑での経験の影響で始まった訳ではないということなのである。ドストエフスキイをペトラシェフスキイ・サークルの人々へと、さらにはその最左翼の人々、スペシネフの下に集まった人々へと引き寄せた軌道は依然として続いているかの如くである¹⁷。

ドストエフスキイの見解の中には、支配的な「環境論」に収まり切らない或る側面が既に当時明らかに幾つかあった。或る種の動揺が始まっていたのである。このことについてストラーホフの言い方は明瞭なものではなく、抽象的な言葉によるものである。「彼は私には余りに不可解であった」「その知恵は絶えず移ろって私を驚かせた。」「彼にあっては何も出来上がってはいないかの様で、様々な思想や感情が実に豊富に増大しつつあったし、うまく言い表すことの出来ないことの裏に、未知の、外へ現われていないものが潜んでいた」様に思われるのであった。また別の場所でストラーホフは述べている。ドストエフスキイの分裂について、ドストエフスキイ自身が「内省」と呼んでいたものについて——或る思想や感情に実に生き活きと没頭しながら、それと同時にそれらの思想や感情を別の側面から、何か揺るぎない魂の中心から見ることの出来る能力について。この内省が現れるのは彼の共感の常ならぬ広さにおいて、「色々な矛盾する見解を理解する」力におい

てであった¹⁸。

理解だけではない。矛盾する見解への何らかの共感があった。「信念の甦生」の最初のプロセスが表面化しつつあった。具体的な例がある。それは、自然哲学を扱ったストラホフの幾つかの論文に対するドストエフスキイの態度である。彼は既にその頃からそれらの論文に特別な注意を払っていた。

ストラホフがその初期の発言でどれほど慎重を期そうとも、ドイツ観念論哲学への傾倒と、それに関連して道德の諸問題を領域とする時の環境論否定は、これらの論文において十分に見て取ることが出来る。

1865年には「生命についての手紙」と題されたストラホフの一連の論文が活字になっている¹⁹。ここでは有機的世界の基本的特性が述べられている。これらの論文でストラホフが説いているのは、有機体においては、ふたつの矛盾する一連の現象とプロセスが生じるということであり、その一方である「循環的現象」は、「有機体が元の姿に再生するのに役立つ。」これは機械的現象群である。もう一方は有機体の発達と、有機体の基本的特徴、有機体の「段階的完成」に関連した現象である。発達とは、この様に、あたかも自分自身の内から、有機体内部の何らかの神秘的な本質から発生するプロセスである。即ち、精神的な起源から、理念から発生するプロセスである。ストラホフの言い方はこうである。「より高次の形態への移行は、外的諸条件よりもむしろ有機体そのものに依拠する。」

このようなストラホフの自然哲学的な考えが、ドストエフスキイの世界観形成にどのように影響することになるかは以下で示すことになる。道德上の諸問題を考慮しつつ、社会における人間の行為に及ぼす周囲の現実の影響という意味からすれば、ストラホフの概念は、彼が既に初期の論文の一つであるII.A.ラヴローフの「実践哲学の諸問題論考」への批評²⁰において腕を振るったほどに露らさまに「環境論」に逆らうほどのものではなかった。

ラヴローフとの論争で、ストラホフは主張している。「人間の行動を真に動かすのは理念であったし、これからもそうであろう」と。また、環境は人間の行為にいかなる影響も及ぼすことは出来ないし、及ぼすことは無い

のだ、と。「本質的に、また避けようもなく、人間の意志はただ一つのもの——他ならぬ自己の自由という理念、非従属という理念、つまり独自の意識的な自己規定という理念にのみ従属している。」この理念の上にやがて築かれるのが『地下室の手記』²¹であり、そこで主人公はどれ程抵抗しても絶えず環境の影響を蒙ることになる。

ストラーホフの語ることによれば、『松明』に1860年に掲載された、チェルヌィシェフスキイやラヴローフの「リアリズム」に反対する諸論考は、「ドストエフスキイの注意を惹いた。」翌年の分厚い雑誌^v『時代』刊行開始を決意し、そのための協働者を物色していたドストエフスキイ兄弟は、この雑誌で働くよう「前から熱心に彼を誘っていた」、ヘーゲルの徒、観念論者ストラーホフを²²。

4

ドストエフスキイの雑誌『時代』の特徴を相当程度決めていたのはストラーホフである。この雑誌が作ろうとしていた「土壌派」イデオロギーの草分けはアポロン・グリゴリエフであった。そしてこの思想を説いたのはドストエフスキイである。だが、グリゴリエフは複雑に過ぎた。彼は自分の思想を明晰なものとするのが決して出来なかったのである。グリゴリエフが或る特殊な、自分なりの言葉で言おうとすることは、読者からすれば、一つの体系というよりも、むしろこの上なく種類を異にする矛盾した要素から成る合金であった。「非凡なほど生き生きと思想を感じ取ることが出来」、実に単純で、時に前から知られているような理念に不意に熱中してその理念にくっきりとした精彩ある表現を与える能力の持ち主ドストエフスキイもまた、自身でその欠点にしばしば不平を漏らしたように、「自己の思想の内容を展開することが出来ず」、一度としてその理念を論理的に説明することがなかった。ひとりストラーホフのみが、この方向——「土壌派」という方向——の本質はどこにあるのかという問いへの答えをこの雑誌に探す者たちにとって、理解可能で適当な説得力を持ち得たのである。

「土壌派」とは言いながら、アポロン・グリゴリーエフとドストエフスキイは、自分たちは西欧派ではなくスラヴ派でもないと繰り返すばかりであった。スラヴ派同様、両者ともに「インテリゲンツィヤは自らの土壌から離れて」しまっており、それゆえ「自らの土壌を探し求めなければならない」という思想に拠っていたが、彼らの言う「土壌」は全く別の、スラヴ派的でないものであり、「民衆」の根源と彼らが理解していたのは別のことだった。そこにあり得たのは二つの道である。そのひとつは、ゲルツェンに倣ってロシアをヨーロッパに対置する方向、現代の様々な問題に照らしつつ、ロシアの民衆だけが「ヨーロッパの孕める」社会主義の理想を実現することが出来るという観点に立ち、ロシアの民衆が今日まで共同体という組織を保持して、その独自の歴史的運命をこのことに向けて準備してきたのだという観点に立つことであり、今ひとつは、スラヴ派のように、ロシアの民衆は「神を孕む民」であり、真のキリスト教である正教がロシア民衆の精神構造を規定しているのだとはっきり認める方向である。

ドストエフスキイは第一の道を行こうと決めた²³。ストラーホフはこのことを、彼が「スラヴ派をほとんど知ることがなかった」からだと説明している。スラヴ派について知っている僅かなことも——それも原典からの知識ではなかったと考えるべきである——ほとんど打ち明けることはなかった、と。だがもちろん、これは正しくはない。この後で示すように、スラヴ派の雑誌『日 (День)』に反対するドストエフスキイの論文は、初期の『時代』に載ったものである。

ゲルツェン思想に接近していたこの草創期について、ストラーホフはこう述べている。「ある時期私は『時代』の方向性とは距離を置いていた。とはいえそれでも、自説を熱心に説いたり、自らの離反を守り通そうとした訳ではなかった。」明らかに、既にその頃からストラーホフには、ドストエフスキイが第一の道でまずまず上手くやれるだろうと信じる気にはなれなかったのである。自己を語るストラーホフの言葉はここでは意味深長である。「それでも新たな方向について考えることに、最初のうち私は取り組んでいたのである。〈…〉だが、曖昧を不愉快とする私の持前から、私は自分がスラヴ派であると率直に認める必要があると判断した。」²⁴

またストラーホフはこのようなことも語っている。「それでなくとも自然に当然の帰結へと、スラヴ派へと」向かっていた事がその通りになるのは比較的早かった。スラヴ派の果たした役割は極めて大きかった。何よりも先ずそれが現れたのは、ニヒリストや「理論家」たち、チェルヌイシェフスキイ、ドブロリユーボフ、ピーサレフらに対する『時代』誌上での彼の闘いにおいてであった。ここでも彼は真実を、といっても彼自身を益することのまじく無さそうな真実を語っているのである。ドストエフスキイなどでは更々なく、他ならぬ彼ストラーホフがニヒリストらの傾向との闘争に基礎を置いたのである²⁵。

ストラーホフは言う。「しかしながら私には我慢がならなかったし、ニヒリストらの教義に対して明確ではっきりとした関係に早く入りたかったのである。」1861年の『時代』6月号に載った論文「ペテルブルク文学について更に述べる」において、彼は初めてこの明確ではっきりとした、そして敵意ある関係に立ち、その後は、この雑誌でほとんど毎号同様の態度を持した。この論文でのストラーホフの発言は次のようなものである。「これらのことすべてを私がこのように物語っているのは、この問題が極めて重要な結末を持っていたからである。つまりそれは『時代』と『同時代人』との完全な決裂という結末に、そして『時代』に対するペテルブルクのジャーナリズム全体の敵意に至るものだったからである。」

慇懃と謙遜してみせるのがストラーホフの特徴であった。自分の果たした役割を誇張して剥き出しにするようなことを彼は決してしなかった。この度はその「謙遜」が彼を裏切っている。『同時代人』との決裂に関して、『時代』に対して最も現実的な意味で責任があるのは彼である。だが、ストラーホフがこの論争を大っぴらにし、余りにも激しい調子でこの論争を行った、というのがその理由だという訳ではない。ストラーホフの書く論文の数々は、何らかのイデオロギーをより明瞭に表現したものとして正当に受け留められていた。そのイデオロギーとは雑誌全体との関係において決定的であろうとするもの、未だ形を成さず、未だ傾向でしかないイデオロギーであった。ストラーホフの諸論文と関連付けるならば、理解されることをなぜか望まず、また理解不能な他の書き手たちの記事の意味も理解されるのであった。

5

はっきりと認めている言葉だけでいうならば、ドストエフスキイにおける「信念の甦生」プロセスは長期に亘った。1863年の『時代』第1号に掲載された『冬に記す夏の印象』では、ゲルツェンの道とスラヴ派の道の間での動揺がスラヴ派の方に傾くことは毫もなかった。このプロセスが明らかなものになったのは1864年の『世紀 (Эпоха)』においてである。ストラーホフと最も近しかった時期である。やや後になって、1873年、『市民 (Гражданин)』を編集していたドストエフスキイはストラーホフにはっきりとこう言っている。「私の見解の半ばはあなたの見解です。」²⁶ ストラーホフはドストエフスキイのこの「大いなる賞讃」について、「頭が芸術的に出来ている人は、自分とあまり傾向を同じくしなくても、思考の論理的展開に大きな美点を見出すのであって、根本の所で一致点があれば、芸術家というものは自らの思想や感情の抽象的な公式化を快く思うことがよくあるのだ。」²⁷ と説明している。

心理的には、これもある程度正しいかも知れない。だがそうでないかも知れない。自らの芸術思想が論理的な言葉に移されたことが、トルストイをどれほど立腹させたかを我々は知っている²⁸。しかしここで問題になるのは心理学などではなく、自分が見解の上でストラーホフに多くを負っているとドストエフスキイ自身が告白したという事実にある。彼がそう述べたのは、他ならぬ『市民』誌の時期、ドストエフスキイの活動の最も反動的な時期であった。

思想が一つになった理由や状況を、ストラーホフはこう説明しようとしている。「私的なお喋りで思想を交換するような時には、これが特に有効である。」この時期、この60年代初頭について、ストラーホフはこう回想する。ドストエフスキイと自分との友情は「特に知的な性格を帯びていたし、実に緊密なものであった。」「私たちの会話は留まることなく、私が人生で得ることの出来たものとして最高のものであった。〈…〉彼にあって私を魅した

もの、驚嘆さえさせたものの中で最も重要であったのは、彼の非凡な頭脳と、どんな思想であってもほんの一言や仄めかして捉えるその速さであった。この、理解の敏捷さにこそ、会話というものの優れた魅力があるのであって、そういう時には思考の流れに自由に身を委せることが出来るし、言い張ったり説明したりする必要は無いし、問いに対してすぐに答えが得られるし、反駁は相手の思想の真ん中に向けられるし、同意は求められることに対して為されるし、当惑や曖昧さは全く無い。当時の尽きること無い会話の数々は私にはそのようなものとして思われるし、私にとっては大きな喜びでもあり、誇りでもあった。」²⁹

このようなドストエフスキとの「尽きること無い」対話について、ストラーホフはある書簡³⁰でやはり喜ばしい気持ちを込めて語っているが、同時にそこには哀感もあった。かつての対話が、ああ、もう久しく行われていない、と。「感情が既に優しいものへと変わりつつあった」あの頃の関係は、もう決して繰り返されることがなかった。1865年からドストエフスキの放浪が始まり、二人の間に距離が生じたからである。しかしここに至って再び和気が生じ、それは彼ら相互の思想の浸透を強く促した。「ありとあらゆるテーマ」で対話がなされた。話題となったのは「事物の本質について、知識の限界について」など、「抽象的な問題がしょっちゅう」だった。むろん、ここでストラーホフは自慢しているのである。彼はこう付け足している。「ドストエフスキがこういった問題を好んだから」と。こうして、ドストエフスキの創作活動の、特に第二期の創作活動の基盤となった纏まりのあるイデオロギー体系が形成されていった。こういうことはすべてストラーホフによって60年代初頭のこととされている。正確に言うと何年のことなのだろう。その経緯は細かく具体的にはされていない。これは態とのことには違いない。この経緯こそが何を措いても重要であるのに。ストラーホフの言うところによれば、ペテルブルクでの「尽きること無い対話」以外にも、一緒に出掛けた1862年夏の外国旅行でも彼らは接近した。ひと月余りの間彼らは離れることがなかったのである。それも知り合いといっちは、ロシア人も外国人も一人も居なかった。歴史的記念物、芸術品、イタリアの郊外にある町々の見物には、ストラーホフによると、余り時間を費やさなかった。かくてこ

の時の旅行で特に記憶に残ったのは「地元の赤葡萄酒を前にした、夜毎の対話」であった³¹。

ここではしなくも次のような事実の比較が思い浮かぶ。ストラーホフの記憶に残ったのは、異国にある時のドストエフスキイの独特の興味の持ち方だった。「挙げて彼の注意が向けられたのは人間であった。それも彼が把握するのは様々な人間の本性と性格だけであった。」³² 街の暮らしや世の中の色々な位置で現れる本性や性格であった。ロシアとヨーロッパ。西欧の文化、その本質は——過去ではなく現在において、ロシアの現実には照らして——どこに存するか。ドストエフスキイがヨーロッパに来て、抽象的に、書物風にでなく解こうとした問題がこれである。ストラーホフと共に骨休めした遅れたイタリア——これは歴史であり、ヨーロッパの過去であった。パリとロンドン——これこそは当時のヨーロッパ文明の最高峰である。イタリアに行く前のドストエフスキイはこの二つの首都に滞在し、そこで初めてヨーロッパの同時代の問題を理解、と言わぬまでも感じ取り、この上なく深い処で体験したのである。階級間矛盾の熾烈さ、一方の極に未曾有の富、凶暴なまでに苛酷な搾取があり、他の極には恐るべき極貧、餓死、何の罪もない子供たちの肉体の、そして精神の破滅。『冬に記す夏の印象』では、こういった事のすべてが、人間への痛みを持って、心揺さぶる形で、それまでのロシア文学で誰一人語ることの無かった力で伝えられたのであった。ロンドンではゲルツェンと何度か会見した。もちろん、ドストエフスキイがゲルツェンに対して「当時実に柔和に接していて、彼の『冬に記す夏の印象』にもこの作家の影響が若干表れている」³³と主張するストラーホフは、ただ文学的な意味でのみその影響を語っているのではない。「問いに対してすぐに答えが得られるし、反駁は相手の思想の真ん中に向けられる」私的な対話の中でドストエフスキイは、やはり自分たちが心平らかにいられなかったテーマに関して、自身の見解をゲルツェンのそれと比べている。ロシアについて、ヨーロッパについて。そしてどうやら、それこそがイタリアで、フローレンスで、ストラーホフとの間に「夕べの対話」が持たれたテーマであり、彼はゲルツェンのようにこのテーマを出して、そして解こうとしている。ロシア、ロシアの歴史、人類の未来におけるロシアの役割——ゲル

ツェン流に解くかスラヴ派流に解くのか。自ら語る如く、ストラーホフは「明晰ならざるを好ま」ず、もうずっと前から「自らスラヴ派であることを率直に認めなければならない」と言い言いしていた。今も彼は、勝利はついに自分側のものになったような気がしていた。『冬に記す夏の印象』のテーマは——全8章の内、7章がこのテーマに費やされている——西欧の現状なのである。第5章「ヴァアル」、第6章「ブルジョア試論」、第7章「前章の続き」、そして第8章「ブリブリとマビシ」——これらの章を読む時我々は、怒りに満ちたブルジョア体制否定のパトスという点で、ゲルツェンの『フランスとイタリアからの手紙』や『向こう岸から』の思想と気分の圏内にある。しかしこれら7つの章に対して、調子と気分で強烈な矛盾となっているのが「まったく以て余計な章」と題され、ロシアを扱った章なのである。それは素朴な民衆の生活の様々なエピソードについての軽いお喋りであり、またそれに対照的な、主として貴族から成る、パリの風儀を奴隷のように真似する特権階級のロシアである。言うまでもなく、未だこれは完全なスラヴ派といったものではない。この点で特徴的なのは、「あえて鎮ま」ろうとせず、「そのニヒリズムにも拘らず、心穏やかならず、憂いに沈む（偉大なる心の徴である）バザーロフゆえに」「こき下ろされた」ツルゲーネフの擁護（第3章）である³⁴。

同じ章の次のような残酷な言葉に、ストラーホフはスラヴ派の声を聞き取ることが出来なかった。ドストエフスキイが同時代の「進歩派」—西欧派を特徴付けたところである。「今や私たちは軍人のように自信満々、文明の曹長然として民衆の上に立ち、見るも楽しいばかりである。両手を腰に、挑むような眼、エフ（Φ）のような形をして——そして時々唾を飛ばすのだ。『秃げ鷲め、われらが貴様なんぞに何習うことがあるか。国民性というものすべて、民族性というものすべてが、本質においてはただの反動と租税の割り振りで、それだけに過ぎないというのに。』」³⁵

しかし西欧派というカテゴリーの中でも穏健な「進歩派」をこのように大まかな形で茶化するのは、60年代から70年代のナロードニキならば誰でもがすることであった。

人類を破滅から救う唯一の手段として「ロシア的原理」を既に公然と宣言

した『冬に記す夏の印象』は1863年に活字になっている。ちょうどその時にポーランド反乱が始まり、ロシアにおける社会の闘争的な社会勢力のこの反乱に対する階級的立場が明確になった。アクサーコフの主宰するスラヴ派の『日』と最近早々とイギリス化したカトコフの『モスクヴァ報知(Московские ведомости)』は、専制政府のすべての決定を支持することによって、猛々しい反動の方向へと楫を切った。ペテルブルクの民主的左派の新聞や雑誌は、検閲規則の下ほほ押しなべて沈黙した。ドストエフスキイ兄弟の『時代』は独自の位置に立つことを決めた。ポーランド問題を具体的な政治運動の面でのみ扱うのではなく、ストラーホフの言い方に倣えば「一般的で抽象的な公式へと高める」ことにしたのである。ストラーホフにこの仕事が託された。「ロシア人」という署名を用いて、彼は「宿命の問題」という題名の論文を書き、そしてこれが原因となって雑誌は発禁となった。

不可解であった。論文は抽象的で、大人し過ぎる程だったのである。ストラーホフはその中で「血と鉄」へのアピールを行った訳ではない。それなのに「モスクヴァ報知」の「猛々しい愛国者たち」は、ストラーホフをポーランド鼻根であると非難した。この論文の思想は次のようなものであった。ポーランド人のロシア人との戦いは基本的に二つの文明の闘いである。ヨーロッパとロシア、偽りの貴族主義的文明と真実の民衆的な文明の闘いである。ポーランド問題の最終的解決は、ロシア人がポーランド人に対して精神的勝利を獲た時にもみ訪れるであろう。その為には我が国がヨーロッパとどの点で異なるのかを理解し、自らの独自の原理を明らかにし、発展させることが不可欠である。ストラーホフの言うところでは、ドストエフスキイはこの論文に満足で、自慢にしていたという³⁶。これは『冬に記す夏の印象』と同じ思想であり、同様のアンチテーゼ——ロシアとヨーロッパ——である。ペテルソン某による『時代』についての密告が『モスクヴァ報知』に載り、『時代』に致命的な危機が迫っているという物騒な噂が立った時、ドストエフスキイはこれに対する回答を書き、自分がスラヴ派へ転じたことを強調した³⁷。

およそ1年が過ぎて、発行禁止された『時代』に代って『世紀』誌の発行を政府が許可した³⁸。まさにこの時、ドストエフスキイは立ち直ったのであ

る。『世紀』でストラーホフはその「ニヒリズムとの闘争」を続け、それは更に果断さを増した。ドストエフスキイは自作『地下室の手記』で、第二の時期の文学活動全体への独自のプロローグとなる作品で登場した³⁹。それは、革命との戦いが、少なくとも70年代の後半まで、彼の主要なテーマとなった時期である。以下、チェルヌィシェフスキイの小説『何をなすべきか』に反対して書かれた『地下室の手記』におけるドストエフスキイの見解が、半ばはかつてストラーホフによって発表された見解であることを詳細に示すことにしよう。

外部的な理由と編集内部の理由により、『世紀』は1年しか存在しなかった⁴⁰。誰が発行を禁じた訳でもない。この雑誌はもはや完全に思想穏健なものとなっていたのである。『世紀』は十分な数の読者に不足した為に自ら発行を止めたのである。当時ドストエフスキイとストラーホフの間に冷却が来ていたことを我々は知っているが、それはまづイデオロギー的な性質の理由によるものではなかった。その後、『未成年』の書かれた時期、両者の間に——それも相当に——イデオロギー上の不一致が立ちはだかる時期に、ドストエフスキイはストラーホフについて容赦ない言葉を口にするようになる。「あれは厭らしい神学生で、それだけのものだ。(…) 彼が馳せ付けたのは、漸く『罪と罰』が成功してからのことだ。」⁴¹ この評言は明らかに、当てにし難い、一時の憤慨に駆られてのものである。1867年から1871年のストラーホフの書簡を、彼に宛てたドストエフスキイの書簡と対照すれば、それらの書簡の遣り取りがあった、ドストエフスキイの国外にあった時期に彼らが思想を同じくしていたことは瞭然としている。ムィシュキン公爵の姿に具体化された『白痴』の基本思想のことを、ストラーホフは自分にとって最も大事で近いものとして語っている。ストラーホフはスラヴ派の雑誌『黎明(Заря)』を編集し(1867年から1870年)、『黎明』でならあなたのご自分の雑誌のように自由にやれますよ、と心を込めてドストエフスキイに書き送っている。『悪霊』はストラーホフを有頂天にした。ドストエフスキイの『市民』編集の頃には、ストラーホフは再び彼と一緒に働いている。かつてのフリーエ主義者、ペトラシェフスキイ・サークルの一員であり、その後スラヴ派の最も主要なエピゴーネンの一人となったダニレフスキイの本、その反

動的本質をこの上ない激しさで表現した本、1869年から1870年にかけて書かれた『ロシアとヨーロッパ』は、二人双方によって「重大事件」として受け留められた。

ダニレフスキイへのある書簡で、生涯に亘って、思想の上でも個人生活でも特別に友誼を結んでいたにも拘らず、何かで腹を立てたストラーホフは、どこか悔いるような気分でドストエフスキイとの関係についてこう漏らしている⁴²。「私は益々むっつり屋になっていきます。この数年私はドストエフスキイと不和の状態にありました。絶えず和解を考えてはいましたが、このまま死ぬまで続けようとしていました。ご承知のように、私はあなたにも腹を立てていたのですよ。しかしこんなことは皆どうして起きるのでしょうか。私が正しく他人は悪いという気が、私にはするのです。しかしついには、きっと自分には何か他人に挑戦的で、言ってみれば他人を不正へと誘う欠陥があるのだという考えに至るのです。全くこれは実に、実に悲しいことです。なぜなら老いと憂鬱は年毎に深まるばかりだからです。」

6

先に述べたように、『時代』と『世紀』の存在した時期はドストエフスキイとストラーホフの親密さが最も深まっていた時期であった。「ニヒリズムとの闘い」は主にストラーホフによって行われ、彼の論文の数々は二つの雑誌の社会的政治的特徴を最高度に規定していた。だが彼の影響力はそれ以上に進行していた。それはストラーホフが現実にはドストエフスキイにとって権威であり得た領域ではあるが、ドストエフスキイに自身の芸術的創作活動の方法そのものを意識させることによって、その哲学的諸見解の深層へと浸透していた。

それはストラーホフ自身が「忠実なヘーゲル哲学」と定義していた哲学であった。そう彼が書いたのは1893年4月、死のほぼ3年前にH.グロートへの手紙であった⁴³。「私はヘーゲル主義者であり、年を重ねる程に、一層弁証法的方法に邁進しております。」⁴⁴ヘーゲル哲学の理想への跪拝ということ

では、1860年の最初の論文「現代におけるヘーゲル哲学の意義について」にも次のようにある。「ヘーゲル哲学と共に哲学者間の軋轢は終わった。ヘーゲルは哲学を科学の段階へ高め、揺るぎない基盤の上に据えたのである…」更に「ヘーゲル思想の本質の所には、あらゆる見解や教義の和解とそれら相互の理解、一体となった融合がある。」自らのヘーゲル哲学信奉をストラーホフはその他一連の論文や書簡の中でも是認している。アントーノヴィッチと論争^{vi}しているのもヘーゲルの為にてであった⁴⁵。

しかし同時代の人々は、「ヘーゲル哲学の内に和解したあらゆる教義」の内、ストラーホフが最も評価しているのがデカルトの教説であることに気付いていた。ストラーホフの説くところによれば、思惟と現実、「知と存在」、「主体と客体」の同一性は、完全にヘーゲルのもののようである。だが実際のところ、「魂の世界、意識的な非継続的な世界」は、物質の世界、「継続的かつ意識されたる世界」に真っ向から鋭く対置される。ストラーホフにとって存在は常にどこか保守的なものである。「主体」との、観念との関係においては、現実是从順な奴隷の状態であり続ける。人間は、人間の理性は「宇宙の過去、現在、未来における中心であり、尺度」である。これが、ストラーホフが絶えることなくその著作の中で繰り返していることなのである。

そして特に我々にとってここで重要なのは、ストラーホフが最も頻繁かつ明瞭に自身の哲学を適用している分野である。主として生理学と心理学の相関関係を扱いながら、彼は何よりも魂の諸現象——人間の中の「謎めき」「暗黒」なるもの、理解の困難なものを理解するに際して、理性に無限の創造力を付与している。この理性の無限の力は次のような寓話で説明される。一日の一定の時間一年の一定の時期地球は暗いという報告を受けて、太陽は地球を視察に出た。さて太陽がどこに姿を現そうと、万物は明々と照らされていた。そこで「太陽は報告を信ぜず、安堵して、以前と同じに照らすようになった。」人間の理性もこれと同じである。理性が何か「暗黒のもの」を指しさえすれば、たちまち「理性の眼差しは早やこの暗黒なるものを明るくするであろう。」⁴⁶ 人間の魂の「暗黒なるもの」、あまりにも常とは異なるために、多くの人には全く幻想的なものに思われた「暗黒なるもの」に、ドストエフスキイはその創造的理性を向けていたのである。思考と存在の——

思考と表象による思考の——同一性に関する立論の、ストラホフによるこの上なく抽象的な解釈の中には、ドストエフスキが自身のリアリズムへの信頼を強めるのに十分な根拠があった。「強める」と言ったが、ストラホフのヘーゲル主義が根本の所でドストエフスキの創作方法を規定したと考える必要は無い。これはドストエフスキによる自身の方法の意識に関して、その方法の法則性の哲学的確認に関しての話に過ぎない。

まさにこの観点によって、我々にとっては次の問いがとりわけ重要なものとなる。それは、観念論者であり、一流のヘーゲル主義者であるストラホフは、思考と存在が起源を持つ原理間の相互関係を——魂と実体の相互関係をどう見ていたのか、という問いである。ドストエフスキの美学上の見解においてこの問題は、芸術と現実の関係に関する問題と溶け合い、中心的な位置を占めている。しかし人物像の、特に主人公の人物像の創造においては、主人公に沁み通っている理念、主人公の心理的気質や、それと等しくその気質によって生み出される現実状況を形成する力としての理念と溶け合っている。それゆえ、例えば「すべては許されている」という理念は完全にラスコーリニコフやイヴァン・カラマゾフを、彼らの魂の体験、生活、人との関りを規定していく。スタヴローギン、シャートフ、キリーロフ、ミュシキン公爵、アリョーシャ・カラマゾフも同じである。彼らは皆、あらゆる点で、一定の理念の現実における具体なのである。

『心理学と生理学の基本概念について』の「序文」では、ストラホフは魂と身体の関係についての通常の宗教的で素朴な概念に留まっている。魂とは「あたかも外殻の内にあるように。身体の内に入っているある存在であり... 死の瞬間、魂は身体を捨て、体のどこか内部の場所から飛び出して行くのである。」この概念は、とストラホフは言う。「純粹に機械的なものであり」、魂については「何か繊細で物質的なもの」、より粗雑なもの、すなわち肉体によって圍繞されているものとして思惟される。実際には、魂と肉体の差別は、外面的な個性性によってではなく、本質的な対立にあり、この二者の関係は「ひとつの物質的なものが、自らの包含されるものと直接的に接触するよりも遥かに深いものである。」「身体とは魂にとって異質で、魂が無理に収められているようなものではなく、魂の何らかの絶

え間ない創造物、すなわち、いわゆる具体なのである。」魂と肉体、観念と本性、魂と物質——これらはすべて前者が後者に対して積極的で創造的に創っていくものとなる二項対立を様々に表現したものである。H.グロートに宛てた或る書簡⁴⁷で、ストラーホフはこの考えを次のような比喩で表している。「私の思うに、物質とは魂の現象する舞台であり競技場に過ぎません。魂の運動する足場であり階段です。階段の一段一段が、昇り降りする人の歩みに合わせて並んでいるのと同様の平行性があります。一段一段はこの動きを生じないだけではなく、完全に不動のものでなければなりません。」物質とは、ストラーホフによれば、言うまでもなく、物質を動かしている魂と同じように可動のものである。魂の生成の新たなモメントは、その都度魂によって形成される物質の内に自らの具体化を見出して行く。しかしこの比喩は、肉体が人間の魂に従属するように、物質は魂に従属するのだということを申し分なく強調している。

ストラーホフの二元論と、我々がドストエフスキイの芸術の構想に捉えることの出来る哲学的諸見解とのこの親近性は、その後も、そして更に深く続いて行く。物質の世界と魂の世界はストラーホフの観点では激しく対立している。物質の世界においてはすべてが「外面的で認識可能である。」この世界に対しては、我々のあらゆる認識力と外的自然の認識という意味ではいかなる意味限界も存在しない種々の能力を用いることが出来る。精神界においてはすべてが内的であり、他者の目に対して閉じられている。「魂は暗黒で神秘的な領域である。」⁴⁸ もしも魂が認証されるならば、いずれにせよ手法は全く異なったものでなければならない。ストラーホフの言うには「自らの感覚によれば、ここで可能なのはただ内観のみ、「視線の自己の内への志向」のみなので、明らかに我々は努力して自分の思考に普通と異なる歩み、思考の通常の歩みとは逆の歩みをさせ、内観を目的として自らを外的世界から遠ざけなければならない。更にストラーホフはこう続けている。「ここで大事なのは自己と外的世界に対して閉じようとするのではなく、デカルトが『物質的なもののすべての形(образ)を空虚で偽りのものと見なし、自らの感覚と形(образ)を自らの思考の外形(виды)と見る』^{vii}と表現したような思考の特別な転換である。明らかに、私は目も閉じず耳を塞ぐことも

せずこれを為すことが出来るし、為さねばならない。」⁴⁹ ドストエフスキイのこの心理学的方法の描写、その絶えざる「逆の歩み」——それは外的世界から内的世界への歩みであり、まさに彼の作品の人物たちは耳を塞ぐことも目を閉じることもなく、自らの感覚と形を自らの思考の外形と見「る」——には、根本的には常に観念がある。

魂の本質とは、その真の本性とはそもそも何処に在るかという問いに対して、ストラホフはこう答えている。「魂の真の本性は、言うまでもなく、人間が時に経験する魂の完全な開示において、人が時に経験する、魂のエネルギーが一杯になっている瞬間において表出されるものである。この完全な魂の生を見る時、我々は、真理、善、自由を<…>形成する条件、そこでしか我々が生きることの出来ない、またそれがなければ我々が眼前に空虚、卑小、無意味しか見ることの出来ない条件を知るのである。<…>これらの、何処からも得ることの出来ない概念を理解出来なければ、魂と魂の生命についてのイメージは持つことが出来ない。」⁵⁰

このようにして観念論的体系は閉じていく。その中心にあるのは人間であり、精神の最高段階としての人間の魂である。自著『全体としての世界』の中で、自然に対する人間の位置を考え、トルストイの言葉によれば、「物質と現象のヒエラルキー」を定めようとする沈着穏健なストラホフは、ほとんど詩を吟ずるかのように高揚している⁵¹。これも自著『永遠の真理について』では、彼はこう述べている。「科学は我々にとって最も重要なものを——生命を包含しない。我々の存在の主要な側面は科学の外に存在している。我々の運命、我々の神、良心、我々の幸福、尊厳と名付けられるものは科学の外に在るのである。<…>それゆえに、現実におけるこれらの観照だけではなく、偉大な思想家や芸術家によるこれらの反映だけではなく、出来の悪い小説^{ロマン}一篇、雑な作り物のお伽噺ひとつでさえ、飛び切り優れた物理や化学の教科書よりももっと一般受けのする強い興味を持っている。我々ひとりひとは巨大な機械の単なる一つの輪ではない。ひとりひとは、主として、人生と呼ばれる喜劇や悲劇の主人公なのである。」⁵²

或る面ではこのように哲学と芸術との間にくっきりとした境界線が引かれ、また或る面では、外的世界、自然を研究する自然諸科学との間にも境界

線が引かれる。芸術が科学よりも真実であるという訳ではない。芸術の諸々の課題は全く別のものであり、もっと複雑でもっと高次のものである。それらは本質的に、人間が、人間の魂が外的世界に依存しないのと同様に、外的世界に依存することもない。自然は魂の間断ない創造物であり、それは人間の身体がその魂の創造物であり表現であるのと同じである。以上のようなものが、ストラーホフの観念論である。魂、観念——それは周囲の現実における唯一能動的な創造する力である。人間は自らに課題と目的を課する。そして「課題があつてそれが解決されざる間、企図があつてそれが実行されざる間、そして目的があつてそれが達成されざる間——その間に行爲が可能なのである。その意味では「生は自己満足であるばかりではなく、自己破壊、自己不満でもある。」⁵³ ドストエフスキイの主人公たちは、この思想を自らの言葉で表現している。人間が必ず幸福を目指すなどと誰が言ったのか。「ひょっとしたら人間は、ちょうど同じだけ苦悩を愛しているのではないか。」^{viii} ストラーホフはこう続ける。「精神の苦しみは、私たちを覚醒させ、前へと、謎めいた、未完成のものへと進ませる。それらの苦しみは産みの苦しみである。」

7

その観念論哲学の立場から、ストラーホフはチェルヌィシエフスキイをも含む「功利主義者たち」をこう揶揄している。「抛とう、歴史も、哲学も、詩も、そしてすべての芸術も。われらの目的はただ一つ——この目的の為に働かぬものがあるだろうか！——物質的幸福があるばかりである。そして恐らく本当に、下らぬことにかまけるのを早々に切り上げれば、われらは見事落ち着くことが出来るだろう。銘々仕事が出来たろう。誰もが腹を満たし、服が着られる。飢えも極貧も知ることなく、健康になる。ひょっと病気になるたら、いつでも医者と薬が見つかる。そしてその時——その時こそ、時には詩や音楽を愉しんだり、膨らんだ胃袋で哲学を捻ってみるのも良いだろう。」⁵⁴ 雑誌『同時代人』に当て付けて書かれたこの言葉は、1861

年5月の『時代』誌第一論文にある。

プーシキン詩の一節「われらは心冷たき去勢人」^{ix}を題銘とするストラーホフの論文「無気力の一例」——これもドストエフスキイの『時代』1862年1月号で活字となった——では、依然として同じ「物質的幸福と人類が蒙る様々な苦しみの除去一般について」の会話がなされる⁵⁵。ストラーホフはやはり、これこそが「最も現実的な今の問題」であると考えている。だがこの問題が持ち上がったのは古い話である。これについては「福音書でも取り上げられており、そこではまさに次のように言われている。『ただ父の御国くにを求めよ。さらば此等これらの物ものは、なんぢらくはに加へらるべし。』^xこの決定を今変える必要は無いと私には思える。」ストラーホフによれば、これが人間の魂の絶対的な意義であり、人間に対する最高の敬意なのである。なぜなら、「人間は常に観念論者であったし、今もこれからもそうである」からである。この後、この命題は次のように発展して行く。「人類とは大したものだ!と、時に言われることがある。これほどの時間地上に生きてありながら、誰一人として餓死せぬように体制を作ることが、今に至るも人間は出来ないでいる、と。何と公正を欠く非難であろう! 一体人間が、いつの日かそのような体制を作ることを自らの主要で唯一の目的としたことがあつたらうか。<…>人間は常により多くを望んできた。人間は終わることなく別の目的、別の希望に夢中になってきた。人間は人生から絶えることなく何か極めて真面目な仕事を作り出し、人生を単なる苦しみの欠如よりも重要で快い事業に変えようとしてきた。」この観念主義は根絶し難い。「人間から観念主義を取り去ることは、頭が痛むからといって人間から頭を取り去ると全く同じことを意味している。」「世界は観念主義によって御されており<…>権力や支配は、何よりも堅固で唯一打ち克ち難いもの——観念主義に従属している。<…>かつてと同様に現在も、世界を治癒し救うにはパンにもよらず、火薬にもよらず、他ならぬ善き知らせによるしかないのである。」

すべてこのような思想は、もちろんそれだけにして考えれば、極めて独創的だというものではない。どんな「神父様」でも、何度となくこのようなスピーチを説教壇からしたことがあるだろう。だが、この思想は、社会関係の或る歴史的契機に当て嵌まる、一貫した哲学と繋がっている。同様の思想は

ドストエフスキイの第二期のほとんどすべての作品——『地下室の手記』に始まり『カラマーゾフの兄弟』に終る——に見出すことが出来る。『作家の日記』で、特に「ゾシマ長老の教え」で、ドストエフスキイはこういった思想をほぼ語を逐うようにして繰り返している。

同じことは1862年の『時代』10月号に掲載されたストラーフの論文「重苦しい時代」にも見られる。それは人間の道徳的責任と社会的幸福に関するものであった。ストラーフは「道徳よりも社会における『幸福』の増大を選び、人間の意識と自由なしで幸福な人間社会が築けるなどと想像する者は、人間の本性を侮辱しているのだ。」⁵⁶と云うが、この考えもまたドストエフスキイに近い。『カラマーゾフの兄弟』第五巻「ProとContra」は完全にこの思想に基づいている。

哲学と倫理学の領域でドストエフスキイとストラーフの思想が一致する例として引くことの出来るものは多い。言うまでもなく、思想の広がり、それを表現する手段、情動の色調は途方もないほどに異なっている。ドストエフスキイの言葉の情熱的な興奮に比べれば、ストラーフの、何よりも文体が活気を欠いて見える。だがこれは既に別のテーマである。

8

晩年になってからストラーフはH.グロートに書いている。自分の書いた物には「反りベラルの物は一頁たりとてなく」専制主義に共感したことはない、と。が、ここでストラーフが完全に正しいとは言えない。哲学的に冷静で、常に「抽象の世界」にあり、適度に穏健であったストラーフは、これといった努力をしなくともある種の公平さを守ることが出来たのである。一方ドストエフスキイは、憤怒の炎に駆られれば、それが生者であれ故人であれ、しばしば敵対者への乱暴な罵倒にまで至ることがあった。論争していた時にはネクラーフを罵り、ペリンスキイの記憶を侮辱し、『煙』の後ではツルゲーネフを戯画化してからかった。ツルゲーネフについてはその他幾つもある。思想上の敵を攻撃する際に度々度を越えたのはアポロン・グ

リギーリエフもそうである——私はここでストラホフに最も近かった人たちを挙げている。そもそも罵倒をその文体の本性としていた陣営は外している。

抽象的な哲学思想の領域だけではなく、理論的命題が周囲の現実に適用されて導かれる実際の結論の領域においても、実証論者や唯物主義者と闘う時のストラホフの振る舞いは彼なりに首尾一貫したものであった。60年代、理論と実際の距離がほとんど無くなっていた時期に（階級闘争が先鋭な形を取る時にはよくあることであるが）、「哲学は遅滞なく行動に移され」、理論は行動を正当化するばかりか、自ら行動の道具となった。その時、生活はあらゆる哲学から気取ったヴェールを取り去り、階級の本質をありありと曝け出させた。観念論の旗の下に、当時もまたそれからも様々な社会的・政治的潮流が主張した。カトコフとその『モスクヴァ報知』も、その頃には既に相当硬直してしまっていた。スラヴ派的保守主義も、イヴァン・アクサーコフとそのグループも、スタシレーヴィチとその仲間達の『ヨーロッパ通報（Вестник Европы）』の薔薇色のリベラリズムも。やや後になると観念論の旗を振った、無定見なことでは恥知らずとって良い程のスヴォーリンの『新時代（Новое время）』もあった。これらすべてを一丸としていたのが、革命的民主主義の理論としての唯物論との半世紀に亘る闘いだったのである。ストラホフにとって、これらの人々の誰彼と並べられるのは余り愉快なことではないかも知れない。そう、例えばメシチェルスキ公爵をストラホフはあからさまに軽蔑していたし、カトコフのことも好きではなかった。一番気に入っていたのはイヴァン・アクサーコフである。だがここまで来るとそれはもう枝葉末節のことである。ストラホフの明晰で論理的な知性は、観念論哲学から通常出て来るのは革命の否定であり、これは実践上は革命との闘いになる、ということを実に良く理解していた。

それゆえ極めて注目し値するのが、半ば哲学的で半ば社会評論的な三冊の著作——就中『西欧との闘争』、つまりは彼のゲルツェン理解である。ストラホフが属したり、共通点を持ったりした陣営にとって、彼のゲルツェン解明の活動や、優れて冷静でほとんど共感を込めているようなゲルツェンへの取り組みは、ほとんど変節のように思われたに違いない。60年代全体を

通じて「ロンドンとジュネーヴの亡命者たち」と行儀よく議論したりすることはほとんどなかった。単に泥をかけたただけである。1873年の『市民』第1号に掲載された「昔の人々」で、些か仮面を被ったようなスタイルではあったが、基本的にはこの上なく乱暴にゲルツェンを攻撃したのはドストエフスキイも同様であった。ドストエフスキイの言い分としては、自分は裕福で贅沢で安全な暮らしをしながら、若い人たちを革命へと突き付け死地に追い遣っている——ドストエフスキイの非難の趣旨はこういうことである。だがストラーホフはゲルツェンを全く別の面から扱っている。彼にとって大事なのは、ゲルツェンによって切り開かれた道程の総てを明らかにすることなのである。

ゲルツェンは大作家であり、^{まこと}真に誠実で、その探求と行動において仮借ない程に首尾一貫している。その出発点は何であり、そしてどこへ辿り着いたのか。ストラーホフによれば、ゲルツェンの活動は革命的なものも正当である。その活動が彼の複雑で真率な性格から来ているものだからである。ロシアを去ったことも、社会主義への熱中も、宗教の否定も正当なものである。ストラーホフの書いた物には、ゲルツェンに対する非難は一つとして無い。だがそれでも尚、この論文は本質のところではストラーホフの最も狡猾なものである。ここでみられる^{トーン}調子が、ストラーホフの目的の為に見説得力のあるものだけに特にそうなのである。

命題が立てられる。ゲルツェンは悲観主義者である。ゲルツェンはその最も早い時期の作品においても——『あるドラマ』でも、『誰の罪か』においても、そして哲学論文においても悲観主義者であった。短い間熱中した後、西欧についても彼は悲観主義者になった。その生涯を通じて彼は悲観主義者であった、というのも彼の要求が余りにも真剣だからである。どんな思想でもゲルツェンはその深部まで理解し、その思想が狭隘であったり、誤っていたりして自分を満足させなくなると、さっと離れて行ってしまふのである。しかし彼の思想は西欧的なものであった。ロシアの大思想家、大作家の中でも、プルードンやフォイエルバッハと並び立つ、最も西欧的な人物、ヨーロッパ文化の最高水準にある人物であった。そしてここに彼の不幸があった。真の西欧派ゲルツェンはロシア民衆の独自の原則を理解しなかつ

た。その結果が、西欧の理想ゆえの「自己のもの、ロシア的なものの放棄」であった。そしてその時ゲルツェンはロシアを後にし、ヨーロッパの最も先進的な国フランスに当初は自分の力を捧げ、その理想の現実への適用に参加しようと努めたのであった。それらの思想がどうやら根柢の弱いものだと判ると、続いて「他者の放棄」が生じた。この二重の放棄によって空虚になりながら、「同時にあらゆる偏頗や偏見から浄化された」魂に初めてロシアへの信仰が生まれ、「祖国の精神生活への生き活きとした已むことの無い切実な同情、自然な共感」が響いたのである。『フランスとイタリアからの手紙』、『向こう岸より』『ロシア民衆と社会主義』——これがゲルツェンの祖国帰還の道標、遂に帰り着くことのなかった歩みの道標である。「幻滅した西欧派は虚無的なスラヴ派に変わったが、多くの点で彼は真にロシアの人間であった。」⁵⁷ このプロセスのすべての段階をロシア的知性の首尾一貫性と迅速さで走り抜け」たゲルツェンはロシアの人間であった。彼はついにロシアへの信仰を感じはしたものの、虚無的な、しかし本物ではないスラヴ派になった。彼はスラヴ派風ではなく、民衆の原則の本質を理解しようとしたのである。

ゲルツェンの仕事の目的は明らかである。ストラーホフ自身は最後の段落でこう正確に規定している。「これがすべてのわが国の文学諸陣営にとっての見本であり、教訓である。わが国の特殊な文化的・歴史的タイプ——それは一切を自らの為に変化させつつ、少しずつ成長し、成熟していくのである。」

このようにストラーホフは自身の目的の為に革命的民主主義者ゲルツェンを利用しようとしていたのである。

9

ストラーホフの論集『ニヒリズムとの闘争』と『西欧との闘争』は、当時最も彼の名を高からしめたものであるとはいえ、学術や哲学の著作と比べれば、もちろん遥かに地味な位置にある。それは、彼の哲学体系の一般的な命

題から導き出された個別的な命題に過ぎず、多くの場合は偶然に産み出されたものである。同様の位置を占めているのが、プーシキン、ツルゲーネフ、トルストイらについて書かれた彼の文学批評論文である。芸術の、特に文学の原則的な問題を、ストラーホフは抑々余り扱うことがなかった。彼は自身の諸々の見解の体系を思想を同じくする者から——やはりドイツ観念論哲学の信奉者として知られたアポロン・グリゴリエフから取り入れた——自分では丸々自作のものだという気でいたが、グリゴリエフの体系を幾分簡略化し、洗練し、そして生命を吹き込んだのである。或いは、ドストエフスキイも主としてストラーホフの解釈でグリゴリエフを受容したと言ったとしても誤りではないかも知れない。グリゴリエフの「有機的批評」の幾多の主張は、このふたり双方に欠落しているからである。

ストラーホフは、グリゴリエフに倣って、トルストイの『戦争と平和』に関する有名な論文数篇で自身の芸術理解を述べている⁵⁸。彼ははっきりとグリゴリエフを引き合いに出している。「グリゴリエフによって、わが国の文学の動きの最も本質的な特徴が極めて正しく、そして深く示された」ので、たとえそんなことを望んでも、「我々は独創的ではいられない」のである⁵⁹。A.グリゴリエフの批評における「一般的諸原則」にとっての一番の源泉が示されるが、まさにそれこそが、ストラーホフが自身の哲学の「一般的諸原則」を借用した出处であった。「それは（グリゴリエフの——訳者）哲学のドイツ観念論が我々に遺した原則である。歴史や芸術を理解しようと望むすべての者が、今なお頼らなければならない哲学が遺した原則である。」⁵⁹ この、ドイツの歴史哲学や芸術哲学は、西欧の傑出した批評家達、ルナン、カーライル、テーヌといった批評家達が理解に努めてはいるものの、真に理解し、自家葉籠中の物としているのは、ひとりA.グリゴリエフのみである。例えばテーヌはこの哲学を極度に単純化し、*実証主義哲学風*に用いている。テーヌにとって個々の芸術作品は単に「作品が現れた時のすべての現象、民族、歴史的状況等の本質という、諸現象の総計」に過ぎない。だがグリゴリエフにとっては、「民族、歴史的状況の本質」そのものは、そういったものによって条件付けられた芸術作品同様に派生的なものである。「それらはすべて同じひとつの精神の一時的で個別の現れなのである。」

ストラホフなら言うであろう、「この精神の絶えざる創造である」と。人間の精神の「普遍不変のもの」、「永遠の要求」、精神の命ある法則と希求は人類全体の本質を成す。この、普遍不変のものは、分離してひとつひとつの民族に具現し、民族の本質を作り成す。それが最も鮮やかに現れるのが芸術である。それゆえ我々は、或る民族の芸術作品を「同じひとつのもの——その民族の精神的本質——を表現する多様な試みとして見なければならぬ。」⁶⁰

これら芸術作品は多様な形式による試みに過ぎない。なぜなら精神とは、理念とは、そして魂とは、ヘーゲル弁証哲学では、常に運動し、発展しているものだからである。加えてそれらには、他民族の異質で、強力で、しばしば圧倒的な影響、「全く完全に出来上がった多種多様な歴史的タイプ」の影響が窺われるようになるからである。或る生活の形、任意の民族という有機体の形態は、それらが流布し、その民族の本質が、その民族のタイプが曖昧になると共感を産む。ロシアの文学が真にこのような状態にあったのはプーシキンの出現までであった。誰にも先駆けてこれら異国のタイプと闘い始めるという、プーシキンの創作活動の偉大な意義はこの点にある。つまりはこういうことである。或る面では、プーシキンは自らの内に「これら適当な理想をそれと意識し、これらのタイプとその体験を自らのものとする為の本能的な力」を見出していた。バイロンのタイプの場合が特にそうである。まず「或るタイプに呼応し、自らの精神的な力でこのタイプに達しようという意志が、そして、そうすることによってそのタイプに肩を並べようという意志があった。別の側面では、生命に富んだ独自の精神が、そのタイプに完全に没頭する能力の無さ、そのタイプに批判的に対し、自身の内でこのタイプを闡明しながら、どうしても同意し得ないという正しい共感を認めようという抑え難い欲求があった。」⁶¹

このように、「詩人の精神におけるプロセスには、三つの契機が見られる。1) 異なる民族という有機体の異質なタイプ、形態、理想の内に「出来上がったもの」として詩人が出会ったすべての偉大なるものへの熱烈で幅広い共感。リツエイ時代、流刑以前の第一のペテルブルク時代、そして南方での叙事詩の時代におけるプーシキンの創作活動はそのようなものである。2)

「そのような共感の内にすっかり逃げ込み、これら異国の形で固まってしまうことの不可能」、これらの形への批判的態度、既に『ジプシー』におけるバイロンの主人公アレコの名誉剥奪に見られる「これらの形の優越に対する抗議」の始まり。 3) 自らのもの、親しいもの、「自らの土壌」への愛。「詩人が——アポロン・グリゴリエフからの引用である——その自意識を成熟させる時期に入り、自分自身の為に詩人自身の本性の内に出来上がってきた、一見完全に相矛盾しあう現象を自分自身の為に明らかにした時、何よりも正しく、誠実な詩人は、かつて囚人^{xi}を、ギレイ^{xii}を、アレコをそうしたように、自らを小さくし、イヴァン・ペトロヴィッチ・ベールキンの形象にまで至るのである。」

A.グリゴリエフはこう主張している。ベールキンのタイプは、創作活動の最後の時期、詩人のお気に入りともいえるタイプになった。「このタイプの調子と視線でプーシキンは多くの心優しい物語を語っている。」『ゴリュエヒノ村史話』も、グリニョーフによる家族年代記『大尉の娘』——「この現在の家族年代記の草分け」——もそうである。そしてこれらにストラホフはトルストイの『戦争と平和』をも含める。そしてここに彼とドストエフスキイとの思想の一致がある。書簡で、そして公には幾つかの論文で、ドストエフスキイは何度も書いている。我々の眼から見て、ヨーロッパの眼から見て、このトルストイの叙事詩がどれほど偉大で完璧であろうと、それはやはり「新しい言葉」ではないのだ、と。『ベールキン物語』を、『大尉の娘』を引っ提げて現れる——これは新しい言葉を持って現れることを現実に意味している。『戦争と平和』はこの言葉の継続であり、その後の発展に過ぎない。ストラホフ同様ドストエフスキイも、次のようなアポロン・グリゴリエフの基本的な思想に完全に同意している。「ベールキンとは、素朴で健全な分別であり、健全な感情、大人しく温和な感情——我々が自分の理解し、感じる能力を自ら悪用することに対して、きちんと声を上げる感情である。」プーシキンの創作における天才的な視界の広さとこの上なく独自の力は、他ならぬこのタイプにおいて明らかになった。「ひとつの詩想に別の詩想を、バイロンにベールキンを彼は対置した。貧しく、謙遜なロシアの現実が、その現実にあるだけの詩想のありだったが、詩人に開示され

た。「気取った夢想」に代えて、ヨーロッパの「暗鬱にして光輝なる諸タイプ」に代えて、現れたのは素朴なロシアのタイプへの愛、「中庸を得た理解と感情が可能な」タイプへの愛であった。

だがこのベールキンの「素朴な顔」はロシア民衆の決定的なタイプであろうか。ロシア民族の「本質」の全き表現であろうか。スラヴ派ならばこう答えるであろう。然り！ ベールキンはアレコ、オネーギンその他の「貪欲な」タイプに対蹠する——民衆が西欧インテリゲンツィヤに、ピョートル以前のロシアがピョートル以後のロシアに対蹠するように。更に広く言えば、東が西に^{xiii} 対蹠するように。グリゴリエフは、そして彼に続いてストラホフとドストエフスキイはまずこう言っている。プーシキンは自ら縮小してイヴァン・ペトロヴィッチ・ベールキンに至った時期にも傲慢なタイプを撥ね付けてはいない。純粋にロシア的で情熱的で力強いタイプならば、我々はプガチョフやドゥブロフスキイ、そしてピョートル大帝（『青銅の騎士』）に持っている。ベールキン自身「蒙昧と化する」ことのないのは、自身の意識において自作の登場人物たちもやはり若干は高処に居るからである。ベールキンのタイプの中に「ほんの一時的ながら、しかし否定的に、批判的に確定されているのは、純粋に標準的な一面なのである。」

正しく確定されたのはロシア的タイプの一面のみであり、それも一時的に西に対して、西の「力強いタイプ」に対して批判的でありながら、しかし撥ね付けることのないようにほんの一時的にである。ここにこそ、彼らとスラヴ派の境界がある。彼らは三人とも『ベールキン物語』や温和で従順なタチヤーナへの否定的態度に憤慨する。ベリンスキイは、このロシア民衆の本質の「純粋に標準的」な、ベールキ的な側面の正当さを理解出来なかったし、認めることが出来なかったのである。だがそれと同時にベリンスキイは正しい。わが国の最も偉大なヨーロッパ人としてのプーシキンについて語る時、『エヴゲーニイ・オネーギン』がプーシキンの最も心血を注いだ作品であり、これこそは「ロシア社会の百科事典」であると語る時、そして、プーシキンは何よりもヨーロッパ人として、そしてヨーロッパ人であるゆえに、すべての民族の天才たちを自らの作品において化身させることが出来たと語る時、ベリンスキイは正しいのである。

「プーシキンは我々の総てである<…>プーシキンは、今のところ我々が民衆の個性の完全な輪郭である... 完全にして欠けるところのない、だがまだ顔料を用いず、形だけで描き出された、今のところ唯一の、民衆の本質の姿である... 生来の天才である彼は、他の特性や身体と出会える機会があれば、受容すべきことのすべてを自らの内に取り込み、捨てるべきものすべてを抛ってきた...」—— 倦むことなく、こう繰り返したのはグリゴリエフである。「土壌派」—— それは東でも西でもなく、西欧派でもスラヴ派でもない。インテリゲンツィヤを民衆に対置するものではなく、或る種の統一、総合の中での融合なのである、と。これがA.グリゴリエフとドストエフスキの理解によるプーシキンの創造である。

ロシア民衆の姿とは、たとえ今のところ「形だけで描き出された」だけであろうと、それでもなお「完全にして欠けるところのない」ものである。ベールキンでもオネーギンでもない。プーシキン自身が—— 今のところ彼ひとりだけが—— 「我々が民衆の個性の唯一完全な形」である。そしてロシアの文学は、挙げてプーシキンに発し、プーシキンに向っている。グリゴリエフに従って、ストラホフはそのようにプーシキン以後のロシア文学の向後の歩みを解説している。ストラホフがそこに見ているのは、一面では、「異国の地の魅惑的な幻や理想を自分の内に無理やり創造し、それを精神の中に確立しようという虚しい努力」であり、また一方では、「このような理想との、やはり虚しい闘い、そしてそれらの理想からすっかり逃れ、純粋に否定的で温和な理想を以てそれらに代えようとする、これも虚しい努力」である。プーシキンにおいてこの闘いは然るべき性格を持っている。彼の天才が明らかに、そして冷静に、この地上にかつてあり、現在あるすべての偉大なるものと自分は同等だと感じていたからである。その他の文学者達—— プーシキンの継承者達—— にあるのは一面性と不完全である。ただプーシキンの描いた形が若干は顔料で塗られてはいる。それゆえグリゴリエフはゴゴリについてこう語る。「ゴゴリは」異土のタイプと理想に対する「我々の反感の物差しに過ぎなかった」、「純粋に否定だけの詩人」であった、と。ストラホフも彼と全く同意見である。ゴゴリの力は、ロシアの地にある「異土の理想」、バイロンの、情熱的で力強いタイ

プの栄冠を失わせることに向けられていた。「心にも生活にももはや英雄的なものはない。英雄的に思えたものは、本質においてフレスタコフ的かポプリシチンの^{xiv} なるものである。」「我々の血縁、同民族、緊密に繋がる者たちを具象化することが、彼には出来なかった。一面からでも、積極的でロシア的な「純粹に模範的な側面」を創ることも、せめてベールキンのタイプを創ることも、彼には出来なかった⁶²。

ツルゲーネフ、トルストイ、ピーセムスキイ、オストロフスキイについても同様である。ゴゴリとは逆に、これらの作家は皆、温和なベールキンの形象を更に練り上げることを専らとしている。或る者はベールキンを過度に理想化し、また或る者はベールキンの極度に制限されていることを感じながら、しかし、「我が国の民族の個性」の輪郭を創ることは出来ていない。「プーシキンのベールキンは——グリゴリエフの言葉を引いてストラホフは言う——ツルゲーネフの諸作品の中では、自分は永遠にベールキンである、「余計者」や「半端者」であると嘆くベールキンであり、ピーセムスキイにあっては、輝きある情熱的なタイプを死ぬ程嘲笑しようとしながら、全く虚しく終わってしまうベールキンであり、トルストイが度外れに、そして力づくで理想化しようとするベールキンであり、オストロフスキイの戯曲『心のままに暮らすな』のピョートル・イリイチでさえ^{xv} その前では大人しくなる…少なくとも新たな謝肉祭と新たなグルーシャまでは大人しくしているようなベールキンなのである。』⁶³

A.グリゴリエフの美学の諸原理、プーシキンへの態度、プーシキン後のロシア文学の一般的な歩み——これらはドストエフスキイも受け入れていた。ストラホフにとって、それらの上に自らの観念論的哲学の一般の原理を築くことは困難ではなかった。既に述べたように、ドストエフスキイは自らの創作方法と芸術イデオロギーを、そのストラホフの哲学で意義付けたのである。それでもふたり共、グリゴリエフの思想に若干のニュアンスを付け加えてはいる。恐らくグリゴリエフの罪^{ざい}ということに関して。グリゴリエフ自身は、温和なベールキンというタイプの不完全であることを十分に意識しながらも、プーシキンの創作活動においての、またそれ以後のロシア文学全体にとっての、このタイプの意義を誇張し過ぎている。ストラ

ホフと特にドストエフスキイは、この点でさらに先へ進むことになる。彼らが純粋なスラヴ派に近づくに従って、彼らにとっての温和なタイプの意義は益々大きくなって行くのである。ストラーホフはこれを条件付きで慎重に行う。ドストエフスキイは——持ち前の情熱を傾けて、何の条件も付けずに行うのである。『戦争と平和』について夢中になって論文を書く中で、「彼においては、偽りの貪欲なる者に抗して我々の精神に湧き起った善への声が響き渡っており、ここにこそこの小説の最大の意義があるとストラーホフは述べているが、それでもやはり、「J.I.H.トルストイ伯の作品ではすべてのロシア的理想が具現化している訳ではない」と付け加えることを必要だと見なしている。なぜなら「決然として勇氣ある人々は事態の歩みにとって何ら重要なものを持たなかったし、また、ロシア民衆がその個別の思想や力を自由に活動させる空間を産み出さなかったという意見を否定し去ることは不可能」だからである⁶⁴。だがすぐにこう付け加える「素朴、善、真実がロシア民衆の至高の理想を形成しているということ、そして、強い情熱という理想、殊の外強力な個性という理想は、この至高の理想に従属すべきものだけということ、これは断じて否定できるものではない。」と。こうして、ロシア的理想の不完全さに関する非難は取り下げられていくのである。

一方ドストエフスキイは、プーシキンについて語る際——プーシキンについては、彼は同時代人の誰よりも多く語った——その天才の偉大さを上のような「ロシア民衆の生まれながらの特徴」と——ベールキンの「素朴と真実」と——ほとんどいつでも関連付けている。だから、未だどんな「哲学」にも出会わない頃、1845年の処女作——『貧しき人々』——でも、マカール・ジェーヴシキンの清い心によって、プーシキンは愛と同情、無垢と謙虚の最高の表現として受け留められており、そのようなプーシキンと対照的なものとしてゴーゴリは受け留められている。^{xvi} ドストエフスキイは、同様の構成を60年代から70年代の自作品においても行っている。「決然として勇氣ある人々、個別の思想や力を自由に活動させる空間を産み出」す人々がそれらの作品で独占的な役割を演じているとはいえ——ドストエフスキイは主に「貪欲なタイプ」に注意を向けている——そのようなタイプとの闘いにおいて、少なくとも作者の構想するところでは、勝

利は「ロシア民衆の至高の理想」に—— ソーニャ・マルメラードヴァ、マカール・ドルゴルーキイ（『未成年』）、アリオージャ・カラマゾフ、そしてゾシマ長老に与えられる。

研究者らはヴラジーミル・ソロヴィヨフのドストエフスキイへの影響を言う。人によっては、フョードロフの名を持ち出すし、また従来、古いスラヴ派のホミャコフやイヴァン・キレエーフスキイにも注意は向けられていた。しかしこれらはすべて極めて主観的である。疑いを容れないことであるが、第一に提起されるべきであったのはストラホフの問題だったのである。それは、ドストエフスキイの「信念甦生のプロセス」が現れ始めたばかりの60年代初頭というその時期に、彼の周辺にいたのが、我々も知るように、ひとりストラホフのみであったという理由だけでもそうである。「土壌派」の思想を練り上げようとしていた人々の小さなサークルの中でストラホフは、ドストエフスキイにもグリゴリエフにも欠けていた首尾一貫性を持つという点で、疑いもなく実に重要な人物であった。ドストエフスキイには彼を、彼自身の表現によれば自分を「反動」へと押し遣ったきっかけや理由が少なからずあった。しかしこの「変節」が生じたその最も近い時期の思想環境を知らなければならない。一体誰がドストエフスキイを支持していたか、誰の助けによってドストエフスキイは自らの新たな道を自身に明らかにして行ったのか。恐らく彼は迷いつつ、躓きつつ足を踏み入れようとしていたのである。自分の過去と決別することは彼には容易なことではなかった。彼にはベリンスキイのような人たちがいて、友情篤き頃には、その思想にドストエフスキイは誓ったのである。「ずっと忠実でいよう」と。そして忠実であったし、若い日々はこの誓いを破ることはなかった。処刑台に立った時にも、処刑の五分前に、自分は信念を裏切ることにはなかったというその事だけで、ドストエフスキイは自らの慰めとしたのである。

原註

- 1 Вопросы философии и психологии. 1896. Кн.2 (32). С.299-300.
- 2 Вопросы философии и психологии. 1896. Кн.2 (32). С.304.
- 3 *Страхов Н.* Материалы для жизнеописания Достоевского. СПб., 1883. С.235.
- 4 Там же. С.231-234.
- 5 Переписка Л.Н.Толстого с Н.Н.Страховым // Толстовский музей. Т.2. СПб., 1914. С.27 (Письмо от 15 марта 1873 г.).
- 6 Там же. С.185 (Письмо от 14 сентября 1878 г.).
- 7 Там же. С.214 (Письмо от 11 марта 1879 г.).
- 8 См.: *Достоевский. Ф.М.* Письма. Т.3. М.; Л., 1934. С.148 (Письмо от 6 февраля 1875 г.).^{xvii}
- 9 Там же. С. 154.^{xviii}
- 10 *Страхов Н.* Материалы для жизнеописания Достоевского. С.224.
- 11 Переписка Л.Н.Толстого с Н.Н.Страховым. С.266 (Письмо от 3 февраля 1881 г.).
- 12 Там же. С.307-309. (Письмо от 28 ноября 1883 г.).
- 13 *Достоевская А.Г.* Воспоминания. М.; Л., 1925. С.285-292.
- 14 Светоч. 1860. Кн.1. Отд. II. С.3-51.
- 15 *Страхов Н.* Материалы для жизнеописания Достоевского. С.172.
- 16 *Страхов Н.* Материалы для жизнеописания Достоевского. С.174.
- 17 См.: *Долинин А.С.* Достоевский среди петрашевцев // Звенья.Т. VI. М.; Л., 1936. С.512-54.
- 18 *Страхов Н.* Материалы для жизнеописания Достоевского. С.175-176.
- 19 Светоч. 1860. Кн.3. С.1-40.; Кн.5. С.1-40.; Кн.8. С.1-23.
- 20 Там же. Кн.7. С.1-13.
- 21 Впервые напечатаны в 1864 г. в «Эпохе».
- 22 *Страхов Н.* Материалы для жизнеописания Достоевского. С.177.
- 23 このことについての詳細は<Последняя вершина>という論考で示した。
Долинин А.С. Полевные романы Достоевского. М.; Л.,1963. С.289-293.
- 24 *Страхов Н.* Материалы для жизнеописания Достоевского. С.205.
- 25 Там же. С.235.
- 26 Там же. С.238.
- 27 Там же. С.238-239.
- 28 *Толстой Л.Н.* Полное собрание сочинений.: В 90 т. (Юбилейное издание).

- М., 1953. Т.62. С.269.
- 29 *Страхов Н.* Материалы для жизнеописания Достоевского. С.225.
- 30 Шестидесятые годы. Л., 1940. С. 259. (Письмо середины марта 1868 г.)
- 31 *Страхов Н.* Материалы для жизнеописания Достоевского. С.244.
- 32 Там же. С.243.
- 33 Там же. С.240.
- 34 *Достоевский Ф.М.* Собрание сочинений.: В 10 т. М.,1956. Т.4.С.79.
- 35 Там же. С.80.
- 36 *Страхов Н.* Материалы для жизнеописания Достоевского. С.247.
- 37 Там же. С.249-254.
- 38 『時代』の発行禁止は1863年5月、『世紀』第一巻の発行は1861年3月のことであった。^{xix}
- 39 Напечатано в «Эпохе». Кн. 1-2 и 4. (『世紀』第1~2号、及び4号に掲載された)
- 40 Закрылось на мартовской книге 1865 г. (1865年3月号で終刊となった)
- 41 *Достоевский Ф.М.* Письма. Т.3. С.155.^{xx}
- 42 Рус. Вестник. 1901. №1. С.458 (Письмо от 12 мая 1882 г.).
- 43 См.: Вопросы философии и психологии. 1896. Кн.2. С.308. Умер Страхов 24 января 1896 г. (Страла-Хофの没したのは1896年1月24日のことであつた。)
- 44 Светоч. 1860. Кн.1. Отд. II. С.3-51.
- 45 См. его статью «Об индюшках и о Гегеле» (Время. 1861. Кн.9. С.69-79).^{xxi}
(彼の論文「七面鳥とヘーゲルについて」『時代』第9巻69-79頁を参照)
- 46 *Страхов Н.* Философские очерки. СПб., 1895. С.20-21.
- 47 Вопросы философии и психологии. 1896. Кн.2 (32). С.314.
- 48 *Страхов Н.* Об основных понятиях психологии и физиологии. СПб., 1894. С.36.
- 49 Там же. С.39-40.
- 50 Там же. С.85.
- 51 *Страхов Н.* Мир как целое. Издание 2-е. СПб., 1892. С. X-XI.
- 52 *Страхов Н.* О вечных истинах. СПб., 1887. С.54-55.
- 53 *Страхов Н.* Мир как целое. С.186-188.
- 54 *Страхов Н.* Из истории литературного нигилизма. 1861-1865. СПб., 1890. С.37.
- 55 Там же. С.122-125.
- 56 *Страхов Н.* Из истории литературного нигилизма. 1861-1865. С.167.
- 57 *Страхов Н.* Борьба с Западом в нашей литературе. Кн.1. СПб., 1887. С.160.
- 以下を参照：

- Страхов Н.* Борьба с Западом в нашей литературе. В Кн. «Борьба с Западом» М., Институт русской цивилизации, 2010; С. 312.
- 58 Напечатано впервые в журнале «Заря». 1869. №1-2. Перепечатано в книге «Критические статьи об И.С.Тургеневе и Л.Н.Толстом (1862-1885)». СПб., 1885. С.224-392. (当初は『黎明』誌1869年1~2号に掲載。後、『И.С.ツルゲーネф、Л.Н.Толстойについての批評論文集(1862-1885)』サンクトペテルブルク、1885年、224-392頁)
- 59 *Страхов Н.* Критические статьи об И.С.Тургеневе и Л.Н.Толстом (1862-1885). СПб., 1885. С.312.
- 60 Там же. С.304.
- 61 Там же. С.306.
- 62 Там же.
- 63 *Григорьев А.* Сочинения. СПб., 1876. Т. I. С.240.
- 64 *Страхов Н.* Критические статьи об И.С.Тургеневе и Л.Н.Толстом (1862-1885). СПб., 1885. С.295, 311-312.
- 65 Там же. С.356-358.

訳註

- i 以下頻出するロシアの雑誌（紙）名に関しては、すべて日本語で示し、参考までに初出の際に（ ）内にロシア語名を記した。
- ii ロシア語の<либерализм>若しくは<либерал>に派生する語は、文脈に応じて適宜「自由主義」と訳すか、そのまま「リベラル」とした。
- iii ドストエフスキイ夫人のこと。
- iv ドリーニンが原註で示した版で確認することは出来なかったが、ここで言及されているのはアンナ夫人の『回想』第12章第2節「ストラホフへの答え」であると思われる。以下を参照。
Достоевская, А.Г. . «Воспоминания», М., “Правда”, 1987. С.416-427.
 ここでアンナ夫人は妻の立場からストラホフの誹謗に一つ一つ答えている。
- v 文学を中心とした総合雑誌のこと。
- vi ヴラヂーミル・アントノヴィッチは聖ヴラヂーミル・キエフ大学の歴史学教授。ツルゲーネフの『父と子』を批判して、これを評価するストラホフと対立した。
- vii デカルトの『省察』（1642）第三冒頭部分からの引用である。この引用について、また出典については山城むつみ氏の教示を得た。参考までにその部分の日本語訳を次に掲げておく。

いま私は目をとじ、耳をふさぎ、あらゆる感覚を退けよう。さらに、物体的事物の像をもことごとく私の意識から抹殺するか、これはほとんど不可能なことであるから、少なくともそれらの像を空虚で偽なるものとして無視することにしよう。そして、ただ自分だけに語りかけ、自己を深く掘さげることによって、少しずつ、私自身を、私にとっていっそうよく知られたもの、いっそう親しいものとするように努めよう。」(井上庄七、森啓、野田又夫訳)(中公クラシックス、2011年、50頁)

viii ドリーニンが引用符に入れずに用いているフレーズ——*Может быть, он ровно настолько же любит страдание?*——は、明らかにドストエフスキの《Записки из поролья》(地下室の手記)の次の一節を引いたものである。

(…) *А человек иногда ужасно любит страдание? Может быть, страдание-то ему ровно настолько же и выгодно, как благоденствие?* (だが人間は時としてひどく苦しみを愛するのではないか。ひょっとしたら、人間にとってこの苦しみというやつはちょうど無事安穩と同じくらいに有利なのではないか。)

Достоевский, Ф.М. Полное собрание сочинений в 30-ти тт., Т.5. С.119.

ix <Мы сердцем холодные скопцы> プーシキンの詩《Поэт и толпа (Чернь)》(1828)より)

x ルカによる福音書12章31節。日本聖書協会訳

xi 《Кавказский пленник (カフカスの囚人)》(1821)の登場人物。

xii 《Бахчисарайский фонтан (バフチサライの噴泉)》(1823)に登場するクリミア汗国の王。

xiii 圈点を付した語は、本文で大文字で書き出される単語である。

xiv フレスタコフは戯曲『検察官』の、ポプリシチンは『死せる魂』の登場人物。

xv А.Н.Островский (1823-1886)の戯曲『心のままに暮らすな』(*Не живи, как хочется*)は、1854年から構想されたが、雑誌『モスクヴァ人 (Москвитянин)』に発表されたのは、1855年の9月号での事であった。主人公ピョートル・イリイチは、酒に溺れ、ダーシャという妻がありながら、独り者を装って旅籠の娘グルーシャに言い寄る。本文中「少なくとも新たな謝肉祭と新たなグルーシャまでは」とあるのは、この戯曲全体がマースレニツァの浮かれた祭日気分を背景としており、ピョートルの放埒もその気分に影響されているとも読めるからであろう。

『心のままに暮らすな』の最初の上演は1854年12月3日、モスクヴァ・マールイ劇場に於いてであった。グリゴリエフ(1864年没)も、またストラホフもこれを見た可能性はあるが、確認できていない。

xvi 『貧しき人々』のマカール・ジェーヴシキンによる読書(プーシキンの『ペールキン物語』とゴーゴリの『外套』)の際の反応を念頭に置いている。

xvii 現在完結しているアカデミー版ドストエフスキ全集では、次で確認できる。

Достоевский. Ф.М. Полное собрание сочинений в 30-ти тт. Т.29, Кн.2-ая, 1986. С.8-9.

xviii 現在完結しているアカデミー版ドストエフスキイ全集では、次で確認できる。

Достоевский. Ф.М. Полное собрание сочинений в 30-ти тт. Т.29, Кн.2-ая, 1986. С.15-16.

xix 「1863年」とあるのは間違いで、正しくは「1864年」である。許可が下りたのは、同年1月のことである。

xx 現在完結しているアカデミー版ドストエフスキイ全集では、次で確認できる。

Достоевский. Ф.М. Полное собрание сочинений в 30-ти тт. Т.29, Кн.2-ая, 1986. С.16-17.

xxi 次を参照：

«Борьба с Западом.», М., Институт русской цивилизации, 2010; С. 312.